

巨人の肩の上に

——政治学においてパーソンズとルーマンはどう使えるのか——

西 山 真 司

目次

はしがき

1. 小野のパーソンズ評価

(1) 初期～中期パーソンズ論

(2) 後期パーソンズ論

2. 小野のルーマン評価

(1) 1980年代のルーマン論

(2) 2000年以降のルーマン論

3. 巨人の肩の上で

(1) 遠くを見る——小野政治学の問題構成

(2) どのように立つのか——小野政治学の評価

4. 小野政治学の、その先へ

おわりに

はしがき

2015年4月5日、政治学科研究会ガイダンスにおいて、小野耕二先生は「若い大学院生・教員に期待すること——定年間近の老教授の経験を踏まえて」と題する報告をしてくださった。それは研究者としてどのような自覚を持つべきかということ、小野先生の経験をもとに語ってくださるものであった。「大きなテーマで論文は書けない」「適切な時期に論文にまとめる」「『長距離ランナー』として走り続ける」といった、私などには耳の痛いお話が多かったのだが、そのなかでも私に気になったフレーズがある。それは小野先生がアドバイスのひとつとして言われた、「巨人の肩の上に」である。

「巨人の肩の上に立つ (Standing on the Shoulders of Giants)」というのは、その起源についてどうも諸説があるらしいのだが¹⁾、アイザック・ニュートンがライバルであったロバート・フックに宛てた手紙において使った表現としてもっともよく知られている。曰く、「もし私がさらに遠くを見渡すことができるとすれば、それは巨人の肩の上に乗っているからにすぎません (If I have seen further it is by standing on ye shoulders of Giants)」²⁾。いまやグーグル・スカラーのトップページにも書かれているこのフレーズ、小野先生は、研究を進めるうえで依拠するもの (理論家・歴史・データ) を確保することが肝心だという文脈で言われたのであった³⁾。これが私の気を引いたのは、それが小野先生の政治学のあり方の、すくなくともある側面を捉えているのではないかと思ったからだ。

小野先生の研究は多岐にわたるが、最初期の頃から一貫して続けられてきたのは社会理論家の研究である。とりわけ、小野先生の最初の公刊論文における T・パーソンズと、まだほとんど邦訳書が存在しなかった 80 年代初頭から研究を始められた N・ルーマンについては、現実政治分析と並行して研究成果が発表されてきた。言うまでもなく、パーソンズとルーマンは 20 世紀の社会理論を代表する偉大な「巨人」であり、さきほどの話の筋から言えば、小野先生はパーソンズやルーマンという巨人の肩の上にも立っていたと考えるのが自然である (例の警句は *shoulders of Giants* であり、肩も巨人も複数形である)。しかし、政治学が“政治”学でなければならぬことにこだわる人であれば、つぎのような疑問をもつかもされない³⁾。パーソンズやルーマンはたしかに「巨人」であるにしても、彼らは政治学者ではないのであり、そのような巨人の肩の上からどのように“政治”を見通すことができるのだろうか、と。

1) 社会学者の R・マートンがこの言葉の由来をエッセイ的に探究して一冊の本にまとめているのは興味深いことである (Merton 1965)。

2) ガイダンス時に口頭で言われたところによれば、小野先生が研究生生活を始められた当初に意識していた「巨人」は、K・マルクスと M・ヴェーバーであったそうである。しかしその後も富永健一の『現代の社会科学者』(富永 1984) を高く評価していたことからわかるように、小野先生は巨人たちの存在をつねに念頭に置かれていたのだと思う。

3) 小野先生自身、政治学が (ジャーナリズムや百科全書や時系列的な事実の羅列から区別されるべき) “政治”についての“学”でなければならないことを強調されてきたし、このことは、小野先生の指導生であった者であれば身をもって承知しているはずである。

本稿では以下でこの疑問に対して、小野先生の政治学がどのような回答をあたえた（ないし、あたえつつある）のかについて、探究していきたい。そして、そのような試みを引き継ぐとしたら、現在の政治学にはなにが不足しているのかを考えてみよう。本稿では最終的に、小野先生による巨人の肩の上への立ち方を批判して、どの方向に「新しい政治学」があるのかを提示するつもりである。

なおここからは小野先生は分析の対象であるので、敬称は外す。

1. 小野のパーソンズ評価

(1) 初期～中期パーソンズ論

小野がパーソンズ論について最初に発表したのは、大学院博士課程在学中の1978年である（パーソンズは1979年に死去）。「中期パーソンズにおける論理構造への一視角」と題されたこの論文は、初期パーソンズから中期パーソンズ⁴⁾に至る理論変容が、どのような論理にもとづいているかを丹念にたどったものである。

初期パーソンズから中期パーソンズへの変容は、簡単に言ってしまうと、諸個人の社会的な行為が可能になるための条件についての哲学的な探求から、社会秩序と諸個人との関係の理論的な体系化へと進んでいったこととして表現できるだろう。前者は「主意主義的行為の理論」というモチーフとして、後者は構造・機能主義的なシステム理論として、それぞれ知られている。小野のパーソンズ評価を見ていく前に、便宜的にもまずはパーソンズの基本的な発想を簡単に押さえておくことにしよう。

初期における主意主義的行為の理論のねらいは、個人が自らの自由意志によって目的・手段連関を選択しつつも、それが社会秩序の可能性と矛

4) パーソンズ理論における「初期」「中期」「後期」は、小野においてつぎのように区分されている（小野 1978: 189-190 註2）。初期は主意主義的行為の理論を提唱した1937年の『社会的行為の構造』が中心であり、中期は構造・機能分析の確立期である1951年の『社会体系論』および『行為の総合理論をめざして』を中心とする。後期はAGIL図式が提示された1953年以降である。こうした時期区分は、パーソンズ論における一種の共通理解でもある。

盾しない条件を析出することであった。パーソンズは、①そもそも個人が目的を主意主義的に選択できるためには、(功利主義思想が想定するように) 目的がランダム (=どれを選んでも同じ) であってはならず、各人の目的が一種のヒエラルキー的な体系を構成していなければならないとし、さらに、②諸個人の自由な行為がホッブズ的な自然状態に行き着くのを回避するためには、目的の体系が諸個人間においても統合されていなければならない、とした。ここで、諸個人に共有された行為の究極的な目的は、個々の人間からは超越した規範として、「究極的な価値」を頂点とする体系を構成していなければならない (Parsons 1935)。よって言い換えれば、パーソンズの主意主義的行為の理論は、——皮肉にも、と言うべきであろう——諸個人における自由な行為のためには、行為自体は自由であってはならないはずだと宣言するのである。それはあたかも、「あなたは自由に行為できるし、あなたの行為は社会秩序と矛盾しない。なぜなら、あなたが行為する目的には、あなたの意志とは無関係に、社会秩序を保存するような価値が常にすでに含まれているからである」と言うようなものであった。

中期パーソンズも、こうした初期パーソンズの発想 (と問題点) を基本的にそのまま継承し、それをシステム理論へと組み換えている。具体的には、①行為者の主観の見地に立ちつつ、②それがいかにして社会秩序を構成するかということ、③行為の価値志向的な側面から導出する、という初期の理論的焦点を、それぞれ「パーソナリティ・システム」「社会システム」「文化システム」として分析的に抽象化し、その関係性を理論化する作業がおこなわれている (Parsons and Shils 1951=1960)。そして、とりわけ社会秩序の分析に際しては、社会システムの静態的な構造をまず措定し、その上で構造の維持に対する寄与や攪乱が生じる過程を機能という観点から分析するための記述的な枠組みが用意された (構造 - 機能主義)。ところで当初からパーソンズにとっては、社会を社会たらしめているのは価値的・文化的な要素であるため、構造 - 機能主義的な分析カテゴリーも、価値的・文化的に用意されることになる。よって、パーソンズにとって相対的に安定的な社会構造とそれを支える共有価値の存在は、分析の前提となっている。構造 - 機能主義的なシステム理論は、パーソンズが目指すべき理論の途中経過段階であることが明言されていたものの (cf. Parsons 1951: 20=1974: 26)、これによって一応パーソンズの理論は哲学を脱して

社会理論と呼びうるところまで到達したのであった。

パーソンズ理論の全容を解明することは本稿の目的ではないので、そろそろ初期から中期にかけてのパーソンズ理論に対する小野の評価を見ていくことにしよう。その評価を端的に示すのは、つぎの部分である。

「パーソンズの行為理論は、人間の価値形成へ向けての能動性を論理的に定置しえず、『共有価値統合』という原理と『秩序の現存』という彼自身の前提とを結合することによって、既存秩序を弁証する理論となっている」（小野 1978: 211）。

一見するとこの引用部分は、よくある類のパーソンズ批判、すなわち、パーソンズの理論は社会変動や紛争など現実に起り得る攪乱の要素を捨象した「ユートピア」的な性格を持っており、「共有価値の偏重」「静態的均衡論」「自己満足の保守主義」に陥っているという批判（cf. Dahrendorf 1958）と、おなじことを述べている⁵⁾。しかし、小野によるパーソンズ批判の焦点は、もうすこし別のところにある。そして後述するように、その点こそが後年まで一貫する小野政治学の本質に関係している⁶⁾。具体的に見てみよう。

小野が初期から中期パーソンズにかけて見ていた問題は、パーソンズ理論が、自由な個人の集合を社会統合へと架橋することに失敗しているというところにある。近代の社会理論においていわゆる「個人と社会」として表象される問題構成を、パーソンズは「ホブズの秩序の問題」として引き継いだのだが、彼の主意主義的行為の理論には「論理的端緒と結論との乖離」（小野 1978: 230）が生じている。つまり、個人が自由に行為する可能性と社会秩序とを両立することがパーソンズ自身の出発点であったはずなのに、結論としての「社会秩序の価値統合」というのは、社会秩序を担保することにばかりに重心が置かれた結果、個人が自由に行為する可能性

5) 私自身、かつてこうした小野の主張をマルクス主義的なパーソンズ批判であるとし理解していなかったが、以降で述べるように、それは早合点であったと思う。とはいえ、小野にマルクス主義的な批判の観点がないわけではない。たとえば小野は、初期パーソンズが「秩序問題」を個人の動機レベルで捉えたことに対して、それが「経済過程内での矛盾・対立の内在的把握の欠如」（小野 1978: 198）をもたらしたと批判している点に注目したい。

6) この点はまた、本論文集所収の田村論文においても指摘されているはずである。

を損なっている、ということである。もし人間が主意主義的に行為できるならば、自分たちが究極的に依って立つ価値基準というものを自ら選択できて然るべきであるし、また共有価値が選択によって変更される余地が残されていなければならない。小野の見るところ、パーソンズは私的な価値が公的な価値へと変換される論理を提示できておらず、したがって、現に秩序が存在していることをもって共有価値説の理論的証明が果たされたことと逆転して考えてしまったきらいがある。同時にまた、中期パーソンズが社会システムを個人には還元できない「創発的的属性」という観点から分析しようとしたことにも、制度化された価値体系が個人の行為を外部から規制するという図式が見て取れる（小野 1978: 223）。

(2) 後期パーソンズ論

中期パーソンズ論の翌年、小野は後期パーソンズ論についても発表している（小野 1979）。小野はもともと初期から中期にかけての分析においても「パーソンズの議論の歴史的限界性」（小野 1978: 241）を指摘していたが、この論文は後期パーソンズにおける社会進化論を題材に、パーソンズが近代社会をどのように位置づけているかをさらに踏み込んで検討したものである。論文の主張としては、後期パーソンズが近代社会を「適応能力の向上」と「普遍主義的価値パターンの拡大」という二つの論理の複合として捉えようとしていたことを示しつつ、現実の社会における社会秩序（＝諸個人の「連帯」）の問題が、その論理からは導出できていないというものであった。つまり、パーソンズ理論のモチーフであった「社会秩序の価値統合」における肝心の「価値」が、理論の外在的なところから、もうすこし正確に言えば、アメリカの現存社会を社会発展の最高形態とするパーソンズ自身のア・プリオリから、密輸入されているとするのである。

ところで、後期パーソンズの社会理論の基本骨格は、中期パーソンズの理論を組み替えることで作られている⁷⁾。その際にパーソンズは、中期ま

7) パーソンズの理論が中期から後期へと移行していった理由は、中期における構造・機能分析が構造分析（＝パターン変数）の用意しかしておらず、機能分析のためのカテゴリーが不十分であったとパーソンズ自身が認識していたためである。そのため、パターン変数の再編成をつうじて、構造・機能主義が「行為システムの基本的な『機能的諸問題』」（Parsons 1953: 624）としてのAGIL図式へと

でのいわゆる文化還元論を克服するために、価値的・文化的な要素をも行為内部の構成要素として位置付け直す AGIL 図式を導入している。けれども、その AGIL 図式と同時に、パーソンズはサイバネティック・ヒエラルキーという考えも導入し、行為と社会秩序を調和させるための最終審級として、「究極的リアリティ」なる行為外的な要素を設定した（cf. Parsons 1961: 970=1991: 33）。人びとの行為から社会秩序が形成されるのは、究極的リアリティが行為の外から行為を制御するからだというわけである。こうして見ても分かるように、後期に至ってもパーソンズは、具体的・経験的な行為を超越する価値的・規範的な“何か”が存在しない限り、最終的に社会秩序は担保されないだろうという懸念を払しょくできなかった⁸⁾。

小野の 1979 年論文は、後期パーソンズの歴史性バイアスを批判する趣旨のものであったのだが、しかし小野の基本的な着眼点は以前の論文から変化していない。つまり、初期の頃からパーソンズ理論に見られた、個的なものから全体の秩序へと至る際の論理レベルでの問題性こそが、小野にとっての関心事であった。小野は言う。

「自己の私的行為がただちに社会的普遍的なものたりえず、何らかの媒介をへてのちにのみ、その普遍性が確証されるという時、その普遍性への系路を抽象的な形で設定し、その『媒介』の意義を論理的に明確にしえないならば、それは当初の問題設定に対する充実な解答とはいえないであろう」（小野 1979: 76）。

この部分からも、小野はパーソンズ理論の成否を、初期の頃の社会秩序の価値統合が克服されたかどうかによって、つまり、個から全体への秩序形成作用が、外在的な価値基準に還元されることなく論理化されたかどうかによって、測っていたと言えるだろう。中期までのパーソンズ論の検討においてその試みは失敗していると判断され、後期の検討では、それが具

改変されることになった。中期パーソンズ理論の概念用具が、どのようなロジックにしたがって後期の図式へと改変されたかに関しては、Parsons and Smelser (1956: 33-38=1958 I: 53-61) に詳しい。

8) 後期パーソンズ論に対しても、これまで数多の批判が投げかけられてきた。ここでそれらを詳述はしないが、入れ子状の四象限で表現する AGIL 図式に対するパーソンズの偏執的なこだわり（高城 1986）や、システム理論と行為理論の整合性の問題（Habermas 1981: Bd.2=1987: 下巻）などが、そうした批判の対象になってきた。

体的にどのようなア・プリオリに由来するのかが示されたのだった。

小野のパーソンズ批判というのは、一見するとその「歴史的限界性」に、つまり、パーソンズの理論には現状を所与とするがゆえのある種の夾雑物が入り込んでいるということに、向けられているかのようなのである。このことは半面において正しいのだが、ただしつぎのことには注意しておきたい。小野の主眼というのは「パーソンズ理論にはバイアスがある（からダメなのだ）」というところではなく、「パーソンズ理論には論理的な飛躍がある（から当初の問題設定に対する回答としては不十分なのだ）」というところにある。この（）の部分を捉え損なってしまうと、いかにもありきたりで非生産的な批判に見えてしまうだろう。小野としては、パーソンズの問題設定を重視するがゆえに、パーソンズ理論がもつ歴史的限界性が批判されなければならないのであった。もちろんその問題設定とは、初期パーソンズに見られた例の秩序問題、すなわち、諸個人が自由に行為することの可能性の担保と全体的な社会秩序の達成の両立である。そして、小野政治学の本質も、この社会秩序の問題に対する理論的な貢献の模索として表現できる。小野のルーマン論を見ながら、このことをさらに確認してみよう。

2. 小野のルーマン評価

(1) 1980年代のルーマン論

小野はパーソンズ論について発表した直後に、ルーマン論にも取り掛かっている。しかし、1980年代において着手されたルーマン論は一度中断され、その後小野のルーマン研究は2000年代に入ってから再開されることになる。

“パーソンズからルーマンへ”というのは、社会理論史においては王道的な流れであるため、パーソンズについてある程度まとまった評価をしてきた小野であれば、そのままルーマン論に移行していくというものももっともであると思われるかもしれない。だが、パーソンズとルーマンには、システム理論や概念用具などの点における連続性ととも、社会理論の根本

的な性格づけにおける明確な断絶性も存在するので⁹⁾、この二人を細大漏らさず比較するというのは実はかなり困難である。そこで80年代の小野は、後期パーソンズ論のときと同様、ルーマン理論の「歴史的な性格、および類型的刻印」（小野 1981: 3）をあきらかにすることを論文の分析視角としている。小野はこうして、ルーマンの政治認識が西ドイツにおける現実的な政治状況を念頭に置いたものであると推測し、そのような現状バイアスが、ルーマン理論における現状肯定的な性格につながっていると主張している（小野 1981, 1982）。

1980年前後までのルーマンは、後のオートポイエーシス概念や「二階の観察」、作動的に閉じた自己言及的システム理論といった議論に発展する直前の段階にあり、パーソンズと同様のシステム理論という選択から、システムの自己維持をいかにして理論化できるかを模索していた。とりわけ、システムが環境の複雑性を縮減することで存立を図ることを基本的なテーゼとし、そこからの派生として、たとえば、①さまざまな社会システムがどのような縮減メカニズムをもちいているかという観点から比較するという機能主義、②システム／環境の差異をシステム内的に処理する能力という観点から捉えられたシステム合理性の問題、③その他の可能性の開示によるシステムの観察能力の向上に結びつけられた社会学的啓蒙、がこの時期のルーマン理論を特徴づけている¹⁰⁾。

こうしたルーマン理論に対しては、ネオ・マルクス主義的な立場からの批判が当時からすでに一般的であった。システムの自己維持を所与の前提とするルーマンの理論は、テクノクラティックで保守主義的なイデオロギーを体現している、というわけだ。1980年代の小野のルーマン批判も、その同一線上にあることは間違いない。とはいえ、ここでも重要なのは、小野がなぜルーマンには現状肯定的な性格があると断じるのかという、その理由の方である。現状肯定的である、というのは小野にとって、個別的なものから全体の秩序形成に向かうような規範の生成過程が理論に組み込まれていないということを意味する。たとえばルーマンの場合であれば、システムの存続に対する寄与に合理性の基準が求められており、そのよう

9) この点に関しては、たとえば三谷（2004）を参照のこと。

10) ルーマンの著作をいちいち列挙していくと煩雑になるが、おそらくこうした観点がもっとも明確に打ち出されているのは、Luhmann（1968=1990）であろう。

な“システムありき”の発想が、現存するシステム（小野が目指すのは行政国家化する政治システム）に問いなおされることのない地位を保証してしまっている、と小野は考える。

「システムの存続メカニズム自体のうちに、ルーマンは『当為命題』へ至る契機（＝『事実的なものの規範性』）を見出そうとした」（小野 1981: 64）。

そのため、社会に存在する個別的利益の多様性（＝複雑性）が、いかにして統一的な決定の確保（＝拘束的な規範の創出）につながっているのかという問題を、ルーマンは「複雑性の縮減によるシステムの存続」というテーゼをさも当然のように持ちだすことであっさり素通りしてしまったのだ、ということである。

このことからわかるように、ルーマン批判における小野の理論的な着眼点は、パーソンズ論のときから変化していない。そして小野の結論は、パーソンズにおいて理論的には解かれなかった問題はルーマンにおいても解かれていない、というものである。むしろ、パーソンズがまだ確保していた「個の行為の主体性に対する視角」（小野 1982: 11）が、ルーマンにおいて消失してしまったことで、より問題は深刻化している。小野にとっては、「システムとしての社会秩序」と「個の主体性」とを、二律背反に陥らずに両立させるような理論こそが必要なのであった。

（2）2000 年以降のルーマン論

小野のルーマン論は、1980 年代中盤以降、いったん途切れる。その理由はさておき、2000 年代に小野がふたたびルーマンへと戻ってきたとき、以前とは状況が大きく変化していた。まず、邦訳書の数が増え、日本においても急速にルーマン理論の内容が知られはじめていた。また上述したように、小野がルーマンから離れていたまさにその時期に、ルーマン理論が（すくなくとも表面上は）大きな変貌を遂げてしまっている。そして何より、98 年にルーマンが死去したことをもって、ルーマン理論の全体像が検討されるべき段階に入ったのだった。

2002 年に発表された論文において小野は、ルーマンの政治理論を現実

の政治状況と直接に関連づけようとする 80 年代の自身の発想には「問題があった」と述べている（小野 2002: 175 註 1）。こう述べることによって小野は、ルーマン理論とその背景となる先進国の政治状況に関連付けること放棄したわけではないものの、テキスト読解を中心に据えてルーマンの政治理論の検討を再開したのだった。その後、小野は信頼論（小野 2006）と権力論（小野 2008）というかたちで、個別のテーマからルーマンの全体的な政治論を描出する途をとった。本稿執筆の 2015 年現在、その試みはまだ完成していないため¹¹⁾、小野がルーマンの政治理論を総体としてどのように評価しているかはわからない。また、2000 年代に入ってから発表された論考も、ルーマンの比較的初期の著作を主な対象としたものであり、小野は 80 年代以降にルーマンが進んでいった方向性についてはほとんど評価らしい評価をしていない。だが、2000 年代以降の小野の着眼点が、本質的なところでかつてのパーソンズ論や 80 年代のルーマン論を引き継いだものであることは読みとれる。

それは、小野がなゼシリーズ論文の最初にルーマンの信頼論を取り上げたのかということにも表れている。小野はルーマンの信頼論に着目する理由として、一般的にソーシャル・キャピタル論や信頼論が政治学に受容されつつあることや、ルーマンの理論発展の初期に信頼論が占めた役割の重要性を挙げている。しかしそれだけでなく、小野の関心はルーマンの信頼論がパーソンズの社会秩序問題に対してどのようなオルタナティブを提起しているかということにある。たとえばつぎのような箇所がそれだ。小野は、初期の著作（ここでは 1965 年『制度としての基本権』）においてルーマンが「行動期待の一般化と信頼とによって、価値や規範によらない形での『人為的な行為基礎』を解明しようと試みた」（小野 2006: 17-18）とし、そして「社会秩序に対するこのイメージは、パーソンズによる『規範的コントロール』への批判にもなっている」（小野 2006: 15-16）と述べている。このことから、小野がルーマンの政治理論を解明しようとするときの第一歩目が、パーソンズの秩序問題に関係づけられていることがわかるだろう。

11) 小野のプランによれば、2000 年代にはいってすでに発表した論文の他に、「政党」論や「社会運動」論を加えてルーマンの政治理論シリーズが完成されることになる（小野 2008: 61 註 1）。

3. 巨人の肩の上で

(1) 遠くを見る——小野政治学の問題構成

これまで、小野がパーソンズやルーマンをどのような観点から見てきたかということをとどってきた。小野は一貫して、パーソンズやルーマンを「個から全体へ」という秩序問題との関連で評価してきたのだった。それは社会理論の評価方法としては王道的なものであるだろう。けれどもここで注目したいのは、小野がパーソンズやルーマンの秩序問題に対する視角を、そのまま政治学に輸入しているということである。このことこそ小野政治学を理解するためのカギであり、小野が政治学者として研究をおこなう際の問題構成そのものとなっているからである。たとえば小野は80年代中頃にルーマン研究を中断する直前、つぎのように言っている。

「政治理論に与えられた主要な課題とは、社会に存在する多様な利害を、その社会の枠内で統合していく論理を見出すことである」(小野 1984: 1)。

小野のこのような見解が、パーソンズやルーマンといった20世紀社会科学における“巨人”の肩の上に立つことによって形成されたものであることは間違いない。たしかに小野にとって、パーソンズの価値統合論は「その社会の枠内で統合していく論理」たりえず、社会システムの事実性から出発するルーマンの社会理論は、秩序の生成プロセス自体を捉えたものではなかっただろう。しかし、問題の端緒をできるだけ抽象的かつ一般的なかたちで捉え、そこで培った理論枠組みから具体的な事象を考えていくという小野の基本的な姿勢は、確実にこの両者の社会理論を研究することで生まれている。事実、包括政党を政党類型の基本とする小野の政党論(小野 2000)も、反決定論を掲げる小野の構成主義的政治理論(小野 2009)も、B・ジェソップやM・アーチャーやE・オストロームに対する小野の高い評価(小野 2010 他)なども、すべてパーソンズの秩序問題との関連において理解することができる。言うなれば、それは個的なもの(=行為者、私的利益、個別的なアイデアなど)を全体的なもの(=社会秩序、公的利益・公共性、全体的なアイデアなど)へと自覚的に媒介する作用こそが、「政治」であるとする発想である。

では、“巨人”の肩の上から見る政治とは、どのようなものなのだろうか。ニュートンは、巨人の肩の上に立つからこそ遠くが見えるのだと言った。小野の場合はおそらくこうだろう。秩序が成立する条件を一般化することで、①社会秩序というものが外部から持ち込まれた規範や“メカニズム”によってなんとなく成り立っているものではなく、あくまでもその社会の内部に生きる人びとが自覚的におこなう政治のはたらしに依存して成立しているのだということ、そして、②そのように一般化した枠組みにおいて政治の特殊性を認識するからこそ、全体社会と政治の領域とを不用意に重ね合わせることなく、その両者の関係について問うことができること¹²⁾。私見になるが、小野の政治学は①の点において政治学の面白さを語りつつ、②の点において政治学がディシプリンとして狭隘化することを戒めていると思う。

けれども、このように書くと「なんだそれだけのことか」と口の悪い人は言うのかもしれない。べつに巨人の肩の上に立たなくても、ふつう政治学者であれば全体社会における政治の原理的なイメージを持っているのではないだろうか、と。だが、政治学者が政治現象について研究するときに、「政治とは何か」を自覚的に問うことはほとんどない。とりわけ最近では、実証的に研究が可能な細分化されたリサーチ・クエッションを立てることが通例となり、政治についての原理的な考察は後景に退いてしまった感がある。他方で小野は、先進国政治分析や紛争処理論などの具体的・個別的なテーマに取り組む際にも、巨人の肩の上に立つからこそ、その射程を遠くまで設定することができる。つまり、具体的なレベルでの研究を、抽象的なレベルにおける政治の原理的な考察と結びつけておこなうことができるのである¹³⁾。このことは、政治学が精巧な科学を標榜しつつもばらばら

12) こうした発想は、パーソンズやルーマンといったシステム理論を経由するからこそもたらされるものである。政治システムが全体社会から機能的に分化しているということは、もはや全体社会自体が政治的に表象されるものではないということと同時に、政治的なものは政治システムにおける専管事項となるということも意味している。これはつまり、政治システムは自己をひとつの機能領域へと限定することによって全体社会における一般化された能力を獲得するということである（Luhmann 2000=2013）。ここに、政治と全体社会の秩序とを区別する思考と、それを前提に政治の特殊性を考える思考の両者が含まれている。

13) 小野は、2002年のルーマン論の結論部分において、政治学は具体的な政治状況を分析することが求められるとしながらも、「もう一方で各国の個別の状況を超えた抽象的視角から、各国の社会秩序が成立するメカニズムを論理化しようとする試みにも現代的意義はある」（小野 2002: 175）と述べている。

でまとまりのないディシプリンに転化することを回避し、政治現象をトータルに理解するために、必要なことであると思われる。

(2) どのように立つのか——小野政治学の評価

こうして、巨人の肩の上に立つことで小野の政治学が得るアドヴァンテージを述べてきた。しかしながら、巨人の肩の上から見える景色から、巨人それ自体にふたたび目を転じてみると、また違った評価ができる。背の高い巨人であれば、パーソンズやルーマンに限らず、ヴェーバーやマルクスといった巨人たちにも小野は慣れ親しんできたのであり、それらが小野の政治学にあたえた視座というのも無視できないだろう。しかし、ここではあえてパーソンズとルーマンに話を絞り、小野自身がその出発点であったパーソンズ・ルーマン系統の秩序問題にどのような貢献をなしたのかという観点から、その政治学を見てみることにしたい。そうすることは、小野政治学の良質な部分を引き継ぎ、不足している部分を補おうとする場合の必須事項であるからだ。

もう一度小野の出発点であったパーソンズの秩序問題に立ち返ると、それは諸個人が自由に行為し得る可能性と、社会秩序が成立し得る可能性を両立させるという問題としてまとめることができる。すでに述べたように、パーソンズ自身は超越的な価値に支えられた規範を人びとが内面化し、同時にそれが社会システムにも制度化されるというように、逆説的なかたちで自由と秩序の両立を構想したのであった。他方でルーマンは、パーソンズによる「社会秩序の価値統合」という図式を批判して、別の社会秩序像を構想した。すなわち、社会システムの要素をコミュニケーションであるとし、かたや人間それ自体は社会システムの環境に位置づけたのである。ルーマンが人間を社会システムの環境に位置づけるのは、人間という存在が社会システムにとって複雑すぎるからという理由によるのだが、このテーゼは同時に、人間の自由を理論的にも保証するものとなっている。たとえばつぎの引用文を見てみよう。

「…このようにシステムと環境が区別され、人間が社会にとっての環境の一部であるとみなされると、人間が社会の一部であるとみなされざるを

得ない場合に考えられるよりも、人間がいつそう複雑であり、同時に非拘束的であると把握できるのである。というのも環境は、システムに比べて、より高次の複雑性を有することや、より少なくしか秩序づけられないことがみとれる点で、システムから区別される領域のことにほかならないからである。こうした考え方では、人間には、人間の環境に比べれば、より高次の自由が容認されており、とりわけ非理性的で非道徳的な行動に対する自由が認められている。人間はもはや社会の尺度ではない。人間が社会の尺度であるとする人間主義の理念は、存続し得ないであろう」（Luhmann 1984: 289=1993: 上 335, 傍点は原文でイタリック）。

この部分を多少敷衍しておこう。一般的なシステム理論には、環境はシステムよりも常に複雑であるという前提がある。ところで「複雑性」とは、多数の要素同士が取り結ぶ関係が、実際に実現し得るものよりも過剰であることを意味する。よって、複雑性は選択を、つまり「複雑性の縮減」を、強制する（ひとつの選択肢が顕在化され、他の選択肢は潜勢化される）。ここで、潜在的な可能性を多数もつような状態は、実現し得る可能性があらかじめ決まっているような状態よりも、より自由であると言える。そこには常に「他の可能性」が残されているからである。ところでパーソンズ理論には、究極的なところで「非理性的で非道徳的な行動に対する自由」は認められていなかった¹⁴⁾。なぜなら、社会秩序が成立するために、人間の行為にはある種の価値が規範として内面化されていなければならないからである。そこでは理論がある種の人間像を先取りしなければならない。それに対してルーマンは、人間を社会システム（=その場その場で成立している社会秩序）の環境に位置づけることによって、人間の自由を捨棄しない社会理論のあり方を構想し、また社会秩序の可能性と人間の自由な行為の可能性とを二律背反なものとする前提を退けたのである。

小野は、パーソンズの理論についてア・プリオリな規範の外挿という観点から批判し、ルーマンの理論について“システム”ありきの発想と「個の主体性の欠如」という観点から批判していた。しかしながら小野自身は、パーソンズの秩序問題について、それを解決するための理論構築に向かっ

14) 西阪仰も同様の観点からパーソンズ批判をおこなっている（西阪 1997: 124）。

たわけではない。むしろ、小野はパーソンズの秩序問題を政治学の問題構成として利用し、その問題構成に照らしてさまざまな政治学理論の良し悪しを判断してきたのであった¹⁵⁾。それは巨人の肩の上への立ち方としては、適切なあり方だと言えるだろう。とはいえ「人間が主体的かつ自由に行為できる可能性と、社会秩序が成立する可能性は、政治的な契機によって媒介されている」という小野政治学の基本テーゼは、パーソンズとルーマンから派生しているわりに、彼らの理論の中身からは十分な利点を引き出せていない。それは、彼らに対する小野の評価が、(本人たちにとっては)外在的なところから引き出されているからであろう¹⁶⁾。

パーソンズが規範による社会秩序の統合に固執したのは、人びとにとって規範がある種の“あたりまえ”として立ち現われてくるからであり、われわれは一度もそうした取り決めをしたこともないにもかかわらず、たいていの場合は規範に従った振る舞いをしている——すくなくとも、そのように見える——からである。また、いま述べたとおり、ルーマンが人間を社会システムの環境に置いたのは、人間存在が社会にとって重要ではないからではなく、人間存在をステレオタイプに切り詰めてしまわないためであり、さらに、社会システムの所与性を述べるのは、人間には抗えない“システム”による社会統合の不可避性を示唆するためではなく、社会を社会たらしめる要素に目を向けさせるためである。この両者の理論がその目的を達成し得たのかどうかはともかく、彼らの評価に際しては以上の点を掬いあげることが必要だったのではないだろうか。

こうした観点から小野のパーソンズ論・ルーマン論を見てみると、小野は巨人の肩の上に立つことで政治学に対する独自の視角を獲得したものの、肩の上への立ち方については無頓着であったのではないかと思えてくる。パーソンズもルーマンも政治学者ではなく、しかも社会科学としてはもっとも抽象度の高い理論を展開した。そうした理論に依拠することで、政治学の視野が広がるというのはもっともである。しかし、その視野の広

15) ここで言うところの「問題構成」という概念と、それが政治理論研究に対して持つ意義については、西山(2014)を参照のこと。

16) しかし、こう述べるからと言って、小野のパーソンズ・ルーマン理解が間違っているとか、そうした批判の仕方がおかしいということが言いたいわけではない。理論家をどのように評価するかは、どのような観点で本人の理論を使おうとするかに依存するわけだから、評価の仕方は自由であっていい。私は、小野とは別の目線でパーソンズとルーマンを見ることを提案しているだけである。

さを保ったまま経験的な政治学へと貢献するためには、パーソンズやルーマンの理論の中身がどのようなかたちで利用できるのか（ないし利用できないのか）ということ、いま一度検討してみるべきであったらう。

4. 小野政治学の、その先へ

最後に、以上のような問題関心から、小野政治学のその先に進むための展望を考えていくことにしたい。私がここでこだわってみたいのは、小野が批判とともに切り捨ててしまったパーソンズやルーマンの理論の中身を、小野政治学の枠内でどのように引き継げるかということである。小野政治学の枠内で、というのは、問題構成として彼らの秩序論を採用しつつ経験的な政治学を構想するという意味である¹⁷⁾。

小野は、個人が自由に行為する可能性と社会秩序が成立する可能性を両立させるために、パーソンズとルーマンが取った解決策を批判してきた。たしかに、パーソンズとルーマンによる解決策は、自由な個人の集まりから秩序を生成していくダイナミズムを欠いた、予定調和的なものに見えるかもしれない。小野の批判は、彼らの理論にはこうしたダイナミズムを組み込む余地がないのではないか、ということであった。しかしながら、いかに予定調和的なものに見えたとしても、パーソンズが言うように、われわれはある種の規範に従った行為をしているように思われるし、ルーマンが言うように、社会秩序には他のものに還元し得ない“社会的なもの”が存在しているように思われる。私は、すこしちがった角度からパーソンズとルーマンの理論を見てみることで、これらの発想を経験的な政治学に生かせるのではないかと考えている。

そのとっかかりになるのが、現象学および「意味」の系譜である。初期パーソンズによる主意主義的行為の理論に対してA・シュッツがおこなった批判や（Grathoff ed. 1978=1980）、ルーマンの理論（とりわけ信頼論）に対して現象学のもった影響を考えれば（Luhmann 1986=1998）、小野が

17) おそらく小野が2000年代に再開されたルーマンの政治理論シリーズにおいても、あまり積極的にルーマン後期の著作を取り上げなかったのは、80年代以前のルーマンには存在していた「経験的で政治の個別的特質を追求する視角」（小野2008: 58）が薄らいでいるからという事情があるのであろう。小野はあくまでも、経験的な政治学との関係からルーマン理論を見ているのである。

こうした現象学の系譜に対して十分な注意を払わなかったのは奇妙なことである。現象学について誤解を恐れず簡潔にまとめてしまえば、それは、本来われわれにとって所与である世界のあり方を、それ自体の権利においてきちんと見つめ直そうというものである¹⁸⁾。そして、パーソンズとルーマンは、現象学や「意味」の系譜に対するスタンスは正反対であったとはいえ、ともに社会的世界は意味的に所与であるというところから出発したのだった。私の提案は、この出発点に立ち返ることで、パーソンズやルーマンと経験的な政治学との接点が回復できるのではないかというものである。たとえば、人びとがある種の規範を“あたりまえ”のものとして、それに従った行為をおこなっている（ように見える）ということも、人びとにとって社会的世界が意味的に所与であるという事態に関係している。また、社会的世界を別のなにかに還元することなく記述するということは、まさに現象学のプログラムそれ自体である。個の主体性と社会秩序を二律背反にせず、「社会に存在する多様な利害を、その社会の枠内で統合していく論理を見出すこと」という小野政治学の課題は、現にわれわれが秩序のなかで主体的に生きているという経験のなかから、政治がどのように構成されているのかを観察するという方向へと転換されるべきなのだ¹⁹⁾。

このように現象学的な知見を踏まえつつパーソンズやルーマンを見てみると、彼らの理論の中身も政治学にとって価値あるものとなる。たとえば、自我と他我の相互行為状況（＝ダイアド）に社会秩序の原基的な形態を見る中期パーソンズの発想（Parsons 1951）は、政治と社会秩序を混同してしまうことを避け²⁰⁾、社会秩序のある特殊な形態としての政治に目を向けさせてくれる。ほとんどの秩序は政治的ではないかたちで生成され得るが、そのことを認識していれば、では反対に政治がどのような場でどのように

18) たとえば晩期における E・フッサールの現象学は、世界が日常的に所与であるという「こうしたわかりきったこと」(Husserl 1954: 50=1995: 92) が、ガリレイ以降の実証主義によって見捨てられてきたことを批判するものであった。

19) 小野は、この課題を構成主義という看板において達成しようとしたと見ることもできる（小野 2009）。けれども、小野の構成主義は現象学を経由していない議論であるために、実在論やもっと一般的な既存の政治学のあり方との差異化が不十分なままに留まっているように思われる。

20) じつはこうした混同は、パーソンズ自身もおこなっていたものであった。後期になって AGIL 図式を導入するまで、パーソンズは政治学が個別的・部分的なディシプリンとして成立することを積極的に否定していた (cf. Parsons 1951: 125-127=1974: 134-135)。

生成されているかを問うことができるだろう。それはすなわち、政治を秩序問題の解決策として考えるのではなく、政治の秩序それ自体を考えるとことだ。また、ルーマンの「複雑性の縮減」や政治システムの合理性という視角は、比較政治にとってもあらたな指針となり得るかもしれない。わざわざ政治学においてパーソンズやルーマンに依拠するのであれば、こうした理論内容の応用可能性はもっと追究されてよいはずである。

おわりに

巨人の肩の上から遠くを見るという比喩は、偉大な理論家に依拠することで社会についての抽象的でマクロな知見を得られる一方で、巨人の足元にある経験的で具体的な事象が見えなくなるということを含意していない。小野の政治学の功績はそのことを示そうとしたことにある。つまり、政治についての原理的な考察と経験的な政治学は、ひとつの政治学として成立し得る。そしてそのような政治学が理論なのか実証（経験分析）なのかという問いは、かなり無意味だろう——それは「夕暮れが存在することによって、昼と夜という概念の確実性が損なわれないのと同じである」（Simmel 1958: 31=1994: 56）。ただし小野の政治学は、そうした「新しい政治学」についてのビジョンを持ちつつも、そこに到達しようとする際にはもともと依拠していたパーソンズやルーマンを切り捨ててしまっているように思われる。それとは反対に私は、パーソンズやルーマンの理論における現象学的な要素に注目することで、小野政治学が持っていた可能性を引き出せるのではないかと提案した。もちろんこの提案を実行していくことは、小野にとってというよりも、私自身にとっての当面の課題である²¹⁾。

政治とは何より、人びとがおこなっていることにほかならない。誰もが認めるこうしたことを、これまでの政治学研究は意外とうまく扱いきれてこなかった。それはこのことが、政治についての原理的な考察を含んでいると同時に、「人びとがおこなっていること」がそれ自体で社会科学のまじめな研究対象になり得るということが、なかなか受け入れられなかったからでもある。パーソンズやルーマンの秩序論を経た政治学であれば、

21) この可能性のひとつとして、私はエスノメソドロジーに注目している。詳しくは、西山（2016）を参照のこと。

そうしたことは難なく受け入れられるだろう。巨人の肩の上に立つべしという小野のアドヴァイスを、私は政治学における重要な指針であると考ええる。しかし、もしその巨人がパーソンズやルーマンであるのなら、われわれがその肩の上から見通すべきなのは、自分がそこに立っていた時にはあたりまえすぎて見えなかった、巨人の足元にある地面なのかもしれない。

大学院生時代の小野先生や、その当時名古屋大学の大学院で学んだ諸先生方と同様に、私は大学院に入学して以来、政治学専攻でありながらパーソンズやルーマンの理論から勉強を始めてきた（あるとき私の研究報告に対して、磯部隆先生が「個体発生は系統発生を繰り返す」と言われたことをよく覚えている）。これが正しい選択であったのかどうか、いまでもよく分からない。ただ、小野先生が「巨人の肩の上に立つ」というお話をされたときに、いろいろと考えさせられることがあった。現在の政治学研究者のキャリアパスをめぐる状況を考えてみても、巨人の肩の上に立ちつつ経験的な研究を志向するという政治学者というものが、今後どのくらい出てくるのであろうか。また、政治学者が依拠すべき巨人が、今後出現することがあり得るのだろうか。政治学が時代とともに専門分化して、世界的な標準化（＝グローバル・スタンダードへの適応）が規範となり、その他政治学界が対応しなければならない状況も急激に変化するなかで、答えは悲観的にならざるを得ない。しかし政治学をめぐる変化が急であるときにこそ、あらためて「巨人の肩の上で」政治学を追求するという姿勢が必要なのではないかと思う。変化の渦から距離を置いたところからなら、「新しい政治学」が目指すべき方向性が見えるかもしれないのだから。

参考文献

※引用に際しては、邦訳のあるものは基本的にそれを参照したが、訳文は適宜修正している場合がある。

- 小野耕二（1978）「中期パーソンズにおける論理構造への一視角」『法政論集』第76号。
小野耕二（1979）「後期パーソンズにおける近代社会論の基本視角」『法政論集』第81号。
小野耕二（1981）「ニクラス・ルーマンにおける政治システム論の形成過程」『法政論集』第89号。

- 小野耕二（1982）「ニクラス・ルーマンの現代政治認識」『法政論集』第 92 号。
- 小野耕二（1984）「ニクラス・ルーマンにおける制御と支配」『社会・経済システム』第 2 号。
- 小野耕二（2000）『転換期の政治変容』日本評論社。
- 小野耕二（2009）「『構成主義的政治理論』の意義」小野耕二編『構成主義的政治理論と比較政治』ミネルヴァ書房。
- 小野耕二（2010）「コモンズの政治学的分析」『法社会学』第 73 号。
- 高城和義（1986）『パーソンズの理論体系』日本評論社。
- 富永健一（1984）『現代の社会科学者』講談社。
- 西阪仰（1997b）「会話分析になにができるか——『社会秩序の問題』をめぐる」奥村隆編『社会学になにができるか』八千代出版。
- 西山真司（2014）「世界観としての政治理論」井上彰・田村哲樹編『政治理論とは何か』風行社。
- 西山真司（2016）「政治学におけるエスノメソドロジーの寄与」『法政論集』第 268 号。
- 三谷武司（2004）「ルーマン型システム理論の妥当条件——実践的動機の解明と理論の評価に向けて——」『ソシオロギス』第 28 号。
- Dahrendorf, Ralf(1958)"Out of Utopia: Toward a Reorientation of Sociological Analysis", *The American Journal of Sociology*, Vol.64, No.2, pp.115-127.
- Grathoff, Richard (ed.) (1978) *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Indiana University Press. [佐藤嘉一訳『社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐる：A・シュッツ＝T・パーソンズ往復書簡』木鐸社、1980年]
- Habermas, Jürgen(1981)*Theorie des Kommunikativen Handelns, Bd.1・2*, Suhrkamp. [河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論（上・中・下）』未来社、1985 - 1987年]
- Husserl, Edmund(1954)*Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Martinus Nijhoff. [細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中公文庫、1995年]
- Luhmann, Niklas(1968)*Zweckbegriff und Systemrationalität Über die Funktion von Zwecken in sozialen System*, J. C. B. Mohr/Paul Siebeck. [馬場靖雄ほか訳『目的概念とシステム合理性』勁草書房、1990年]
- (1984)*Sozial System. Grundriß einer allgemeine Theorie*, Suhrkamp[佐藤勉監訳『社会システム（上）（下）』恒星社厚生閣、1993年、1995年]
- (1986)*Die Lebenswelt: nach Rücksprache mit Phänomenologen*, *Archiv für Rechts- und*

- Sozialphilosophie*, 72, Heft 2, S.176-194.[青山治城訳「生活世界——現象学者たちとの対話のために」『情況：特集 社会学理論の現在・現象学とシステム理論』一・二月号、1998年]——(2000) *Die Politik der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag.[小松丈晃訳『社会の政治』法政大学出版局、2013年]
- Merton, Robert K (1965) *On the Shoulders of Giants : A Shandean Postscript*, Free Press.
- Parsons, Talcott (1935) "The Place of Ultimate Values in Sociological Theory", *International Journal of Ethics*, Vol.45, No.3, pp.282-316.
- (1937[1968]) *The Structure of Social Action, vol.1-2*, The Free Press.[稲上毅・厚東洋輔ほか訳『社会的行為の構造 (第一～五分冊)』木鐸社、1974～1989年]
- (1938) "The Role of Ideas in Social Action", *American Sociological Review*, Vol.3, No.5, pp.652-664.
- (1945) "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology", in Gurvitch, Georges and Moore, Wilbert E. (eds.), *Twentieth Century Sociology*, Books for Libraries Press.
- (1951) *The Social System*, The Free Press[佐藤勉訳『社会体系論』青木書店、1974年]
- (1953) "Some Comments on the State of the General Theory of Action", *American Sociological Review*, Vol.18, No.6, pp.618-631.
- Parsons, Talcott and Shils, Edward (eds.) (1951) *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press.[永井道夫・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして (抄訳)』日本評論新社、1960年]
- Parsons, Talcott and Smelser, Neil J (1956) *Economy and Society: A Study in the Integration of Economic and Social Theory*, Routledge and Kegan Paul.[富永健一訳『経済と社会：経済学理論と社会学理論の統合についての研究 I・II』岩波書店、1958年、1959年]